Osaka University Knowledge Archive

Title	複言語学習のススメ　ー文字講座を通した音と文字の学び方ー
Author(s)	大前, 智美; 岩居, 弘樹
Citation	PCカンファレンス論文集. 2024, 2024, p. 240-242
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/101078
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

複言語学習のススメ　−文字講座を通した音と文字の学び方−

大前智美[*1]・岩居弘樹[*1]
Email: omae.tomomi.cmc@osaka-u.ac.jp

*1：大阪大学サイバーメディアセンター

◎Key Words　　複言語学習，オンライン講座，ICT 支援外国語学習

1.　はじめに

多言語多文化社会へ移行しつつある日本では，多言語・異文化理解が求められている。発表者らは，さまざまな言葉に触れることで世界の人々や文化に関心を持ち，多様性を認め，受け入れる力を身につけることを目的として複言語学習を行っている。複言語学習の講座は小学生向けの講座と市民向けの講座の 2 種類を実施している。

市民向けの複言語学習は，あいさつや自己紹介などの表現を同時に 3〜4 言語で学習する。この講座の大きな特徴は，学習時に文字を使わず，聞いた音をそのまま声に出すという点にある。受講生は講師の発音を聞き，何度も発音し定着させ，学習内容をビデオで記録する。そして，学習成果のビデオを共有することで，受講生同士で学び合い，さらに理解を深めるというサイクルで学習を行なっている。

また，音を中心としたこれまでの複言語学習の次のステップとして，学習した内容を文字に結びつけるための文字講座を展開した。2021 年度には試行的に，2022 年度からはコンテンツを充実させ，ローマンアルファベット以外の文字を使う言語を対象としたオンライン文字講座を開講した。本発表では，2022 年から行ったオンラインでの文字講座の運用やコンテンツ作成，文字学習支援について報告し，複言語学習における音と文字の学び方について検討する。

2.　文字講座の概要・コンテンツ

2.1　実施言語と内容

2021 年度〜2023 年度の 3 年間で以下の言語の文字講座を実施した。受講対象者はこれまでの複言語学習の講座の受講者で，継続して学習を希望する受講者や音だけでなく文字や文法の学習へと発展させたいと希望する参加者を対象とした。講座の受講者は 1 言語 5 名程度の少人数に限定した。

表 1　文字講座実施言語

2021 年度	2022 年度	2023 年度
韓国語	韓国語	韓国語
ロシア語	ペルシア語	ペルシア語
ブルガリア語	ロシア語	ヒンディー語
		タイ語

講座の内容は，以下のとおりである。

1. 基本的な情報の共有：その言語が話される地域についての情報，文字の成り立ちや身近にある文字や言葉について講師から話題を提供する
2. 複言語学習で学習した内容の復習：参加者は複言語学習であいさつや自己紹介などの表現を音で学習している。それらの表現を復習，確認したのちに，それらを文字にすることにつなげる
3. あいさつや名前の書き方の練習：あいさつ表現などを復習したのち，講師の作成したコンテンツを使用して，文字の書き方を実践的に学ぶ

本文字講座は，最初に音で言葉に触れ，次にその音や表現をどのように文字にするかという流れで学ぶ。また，通常の複言語学習は，どの言語の学習でも共通の表現を同時並行で学習するため，文字講座においても教材の構成，講座内容は共通の枠組みで行っている。

2.2　導入教材：国の情報，身近にある文字

本講座では，すでに音で学習したあいさつや自分の名前を書くことを通して，音と文字を結びつけ，文字やその言語への知識を深めることを目的としている。

講座の導入時にその言葉の話されている地域の情報や現地の看板などにある文字の表記，日本でも目にする学習言語の文字，例えば看板にある韓国語の文字や絵文字に使われるキリル文字などを紹介するスライドを講師が用意して受講者の関心を引いている。

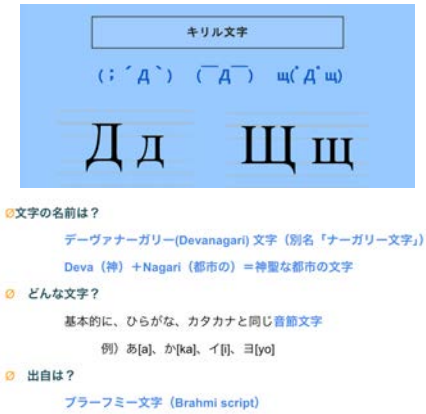

図 1　文字の紹介（ロシア語・ヒンディー語）

2.3　五十音表

受講生はすでに音であいさつなどの表現を学習しているので，その音をどのように文字にするのかを考える際に，五十音表があれば対応する文字を書き出してみることが可能になると考えた。

例えば日本語で「こ」を表す文字が韓国語では「거」「고」「코」「커」「꼬」「꺼」など複数の可能性があるなど，日本語では同じ音に聞こえるけれど違う音・文字となることや日本語にはない音があるなど，五十音表では全ての音を表すことはできない。しかし、五十音表があることで子音字

と母音字が合わさってできる文字の形を理解しやすくなるということもあり，各言語で五十音表を作成し，受講生に共有した。

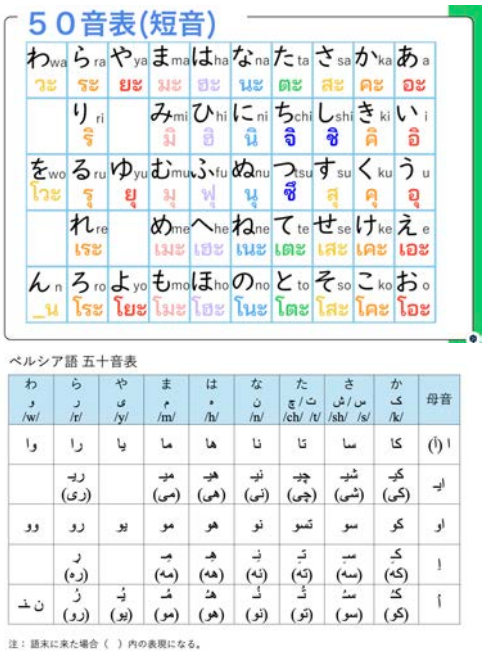

図２　五十音表（タイ語・ペルシア語）

2.4　文字入力支援

ペルシア文字，デーヴァナーガリー文字（ヒンディー語）やキリル文字（ロシア語）のような普段書きなれない言語では，まずオンラインキーボード LEXILOGOS[1] を使いながら一つ一つの文字の形，次に来る文字とのつながりを確認した。

例えばペルシア語では，「س」「ل」「ا」「م」と入力すると，「سلام」（こんにちは）のように文字の形が変わってつながることをキーボードで入力しながら確認した。LEXILOGOS を使用することで文字と文字のつながり方，綴り方，文字と音の関係を理解しやすくなるという効果があった。

図３　オンラインキーボード（ヒンディー語）

2.5　文字の書き方・添削

五十音表や LEXILOGOS で文字の形を紹介した後，それらを参考に手書き，あるいは言語によっては LEXILOGOS を使って，学習した表現の入力にチャレンジした。実際に受講者があいさつや自分の名前を書いたものを講師に添削してもらいながら文字の学習を進める。

図４　文字の添削（タイ語）

講座中には，受講者がお手本を見ながら書いた文字を画面に写し講師が確認したり（図４），Zoom のホワイトボードの機能を利用してみんなで文字を書いて（図５）正しいかどうかを確認した。

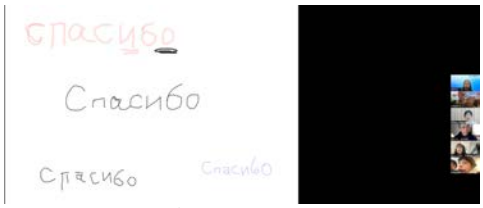

図５　文字の添削（ロシア語）

どの言語も音と五十音表などを手がかりに単語の綴りを正確に表すことはとても難しく，短い時間での講座では伝え切ることができないこともある。そのため，あいさつ表現や受講生の名前の書き方のお手本動画をあらかじめ用意して受講生に共有し，受講生はそれらの動画や画像を見ながら，書き順の確認をしたり，タブレットなどでなぞって書く練習を行なっている。

2.6　補助教材：Quizlet，Mindstamp

あいさつや名前を書くことで，音と文字の対応を意識することはできるようになる。しかし，1 回の講座（45 分×2 セッション）では文字の学習を終えることはできない。そのため，韓国語やロシア語などでは Quizlet[2] で発音が日本語と似ている単語や食べ物など身近なものの単語リストを作成し，受講生が一人でも継続して学習ができるよう支援している。Quizlet は語彙の学習などに使用されるアプリであるが，単語の読み上げ機能があり，音と文字を関連づけながら文字を習得するのに役立つと考えられる。

また，韓国語については，Mindstamp[3] を用いて，文字の成り立ちを説明したインタラクティブな動画コンテンツを作成し，公開している。

図６　Mindstamp による復習教材（韓国語）

[1] マルチリンガルオンラインキーボード：https://www.lexilogos.com/keyboard/

[2] Quizlet：https://quizlet.com/

[3] インタラクティブビデオ作成アプリ：https://mindstamp.com/

3. 受講生の反応

講座終了後に文字講座に参加した受講者対象にアンケートを実施した。アンケートの結果から，文字講座による3つの効果と問題点についてまとめる。

3.1 言葉の理解

複言語学習の講座の後にこの文字講座を受講することで，言葉への理解がより深まったという意見が見られた。また，「文字がわかると現地のことばの発音がより詳しくわかる。日本語読みが全然違うことに気づけて面白かった」という，音で導入する複言語学習の意義を理解し，その上で文字を学習することで，音で学習した内容と文字を結びつけ，理解を深められることに気づく声があった。

3.2 異文化への理解

講師の紹介した言葉や文化の情報により，言葉だけでなくその国への興味がわき，文字が読めないとわからない文化・慣習を知るきっかけになっている。例えば，タイの看板（図7）にはタイ人価格と観光客向けの価格が表示されているものがあり，「そのような価格差があること，タイ語が読めるとそれを知ることができ，びっくりしました」というような文字や言葉を知ることで得られる気づきについてのコメントがあった。

図7　タイの看板

複言語学習は多様な文化や考えがあることに気づき，受け入れることのきっかけとなることを学習の目的の1つとしているが，文字講座を通して受講生自身が異文化を受け入れるきっかけとなっていることがわかる。

3.3 言語学習への意欲

自分の名前をローマンアルファベット以外の文字で表記することの楽しさ，文字を書く向きの違いなどに気づく受講生が多くいた。文字学習を行うことで，全く読めなかった文字に親しみを感じ，講師の作成した五十音表を見れば学習した言語を読むことができるようになったという達成感を感じている受講生もいる。その結果，「次は簡単な文章にも触れてみたい」，「ヒンディー以外のインドの文字講座も受けてみたい」，「単語だけではなく，喋ったり簡単な文法も学んでみたい」というように，次のステップへの学習意欲を示す意見も多くみられた。

3.4 問題点と課題

オンライン（Zoom）による文字講座だったため，資料を見ながら書いて，それを添削することの難しさ，「自分で書いた文字がどのぐらい正しいのかわからない」というような正しさを確認することの難しさを示す意見があった。資料の提示方法や学習の記録を残した上で学習者にフィードバックすることが今後のオンライン文字講座での課題となる。

さらに作成したコンテンツに音を組み合わせること，講座後に継続して学習ができるようなコンテンツを充実させる必要があることがわかった。

4. おわりに

発表者らの行っている市民向けの複言語学習は，未就学児から大人まで幅広い年齢層の参加者がいる。受講者たちが同じスタート地点に立ち，音を聞いて，時には体を使ってアクセントや声調を真似しながら複数の言語や文化に触れ，あいさつや自己紹介の表現を学習することが特徴である。この講座を受講した受講者からの，学習を継続し，言葉への理解を深めたい，文字を知りたいという要望を受け，2022年度から文字講座を実施してきた。1回の講座で学習する内容は限られているとはいえ，本講座を通して，すでに音で学習した内容と文字を結びつけ，表現を記録・記憶し，学習した内容を総合的に理解している様子がうかがえた。

複言語学習は，多言語異文化への理解を深め，互いの違いを受け入れる力を身につけることを目的としている。通常の複言語学習とこの文字講座を通して，いくつもの言語・文化を知るきっかけとなり，外国語学習を継続している受講者もおり，本講座の効果を実感している。

今後は音の伝え方，文字の取り入れ方などこれまでの課題を整理し，音と文字を効果的に結び合わせた複言語学習の講座へと発展させたいと考えている。

参考文献

(1) 岩居弘樹：“医療系大学における「複言語学習のすすめ」－ICT支援によるオンライン開講の試みと可能性－”，複言語・多言語教育研究，No.10，pp124-139，（2022）
(2) 岩居弘樹，大前智美：“小学校向けオンライン「複言語学習」の可能性と課題－大規模校での実践を通して－”，2023 PCカンファレンス論文集，pp.207-210（2023）
(3) 大前智美，岩居弘樹：“「複言語学習のススメ」による学び方の学び”，2023 PC カンファレンス論文集，pp.243-245（2023）.
(4) 大阪大学市民講座　世界の言葉プロジェクト：https://bit.ly/3R1giZF
(5) 文字講座2023のコンテンツ共有サイト：https://bit.ly/3Vk7osX
(6) Mindstampで作成したハングルの成り立ち：https://myinteractive.video/w/ufbnsoSeYJsr

本研究は JSPS 科研費 JP 21H00543 の助成を受けたものです。